

諸教派の旧約聖書（正典）

ユダヤ教	プロテスタント	カトリック	ユダヤ教	プロテスタント	カトリック
モーセ五書 (トーラー)	歴史書		預言者(ネビーイーム): 後の預言者	預言書	
創世記	創世記	創世記	イザヤ書	イザヤ書	イザヤ書
出エジプト記	出エジプト記	出エジプト記	エレミヤ書	エレミヤ書	エレミヤ書
レビ記	レビ記	レビ記		哀歌	哀歌
民数記	民数記	民数記	エゼキエル書	エゼキエル書	エゼキエル書
申命記	申命記	申命記			バルク書
預言者(ネビーイーム) 前の預言者				ダニエル書	ダニエル書
ヨシュア記	ヨシュア記	ヨシュア記	ホセア書	ホセア書	ホセア書
士師記	士師記	士師記	ヨエル書	ヨエル書	ヨエル書
サムエル記上	サムエル記上	サムエル記上	アモス書	アモス書	アモス書
サムエル記下	サムエル記下	サムエル記下	オバデヤ書	オバデヤ書	オバデヤ書
列王記上	列王記上	列王記上	ヨナ書	ヨナ書	ヨナ書
列王記下	列王記下	列王記下	ミカ書	ミカ書	ミカ書
諸書			ナホム書	ナホム書	ナホム書
ルツ記	ルツ記	ルツ記			
歴代誌上	歴代誌上	歴代誌上	ハバクク書	ハバクク書	ハバクク書
歴代誌下	歴代誌下	歴代誌下	ゼファニヤ書	ゼファニヤ書	ゼファニヤ書
エズラ記	エズラ記	エズラ記	ハガイ書	ハガイ書	ハガイ書
ネヘミヤ記	ネヘミヤ記	ネヘミヤ記	ゼカリヤ書	ゼカリヤ書	ゼカリヤ書
		トビト記	マラキ書	マラキ書	マラキ書
		ユディト記			
エステル記	エステル記	エステル記			
		マカバイ記上			
		マカバイ記下			
ダニエル書	知恵文学				
ヨブ記	ヨブ記	ヨブ記			
詩篇	詩篇	詩篇			
箴言	箴言	箴言			
コヘレトの言葉	コヘレトの言葉	コヘレトの言葉			
雅歌	雅歌	雅歌			
		シラ書			
		知恵の書			

「モーセ五書」は、紀元前4世紀頃には正典的な権威が与えられていた。『ヨシュア記』『列王記』に至る4書は、その後もなく正典的な扱いを受けた。これを「前の預言書」という。

「後の預言書」「諸書」は、捕囚期から紀元前4世紀頃の部分も含んでおり、紀元前2世紀頃に正典的な地位が確立された。紀元前250年頃からギリシア語に翻訳された七十人訳聖書には、ヘブライ語の原典をもたないものが多くふくまれていたが、最終的には、1世紀の終わりごろユダヤ教においてキリスト教を排斥したヤムニア会議でこれらは排除された。このとき定められたヘブライ語本文を、8世紀以降、マソラ学者が母音記号等を加えて編集したものがマソラ本文で全24書である。

西方教会では16世紀の宗教改革時にプロテスタント教会がウルガータを退け、原語のヘブライ語で書かれた旧約聖書（マソラ本文）を原典として採用することとなった[7]。この結果、西方教会内でもカトリックとプロテスタントでは文書の構成が大きく異なることになった（後掲の一覧を参照のこと）。プロテスタント諸派が「外典」として排除する書物の一部は、『新共同訳聖書』では「旧約聖書続編」として扱われている。

新約聖書文書一覧

歴史書

福音書

マタイによる福音書
マルコによる福音書
ルカによる福音書
ヨハネによる福音書

使徒言行録

知恵文学

パウロ書簡

ローマの信徒への手紙
コリントの信徒への手紙一
コリントの信徒への手紙二
ガラテヤの信徒への手紙
エフェソの信徒への手紙
フィリピの信徒への手紙
コロサイの信徒への手紙
テサロニケの信徒への手紙一
テサロニケの信徒への手紙二
テモテへの手紙一
テモテへの手紙二
テトスへの手紙
フィレモンへの手紙

ヘブライ人への手紙

公同書簡

ヤコブの手紙
ペトロの手紙一
ペトロの手紙二
ヨハネの手紙一
ヨハネの手紙二
ヨハネの手紙三
ユダの手紙

預言者(黙示文学)

ヨハネの黙示録

新約聖書の正典化は2世紀から4世紀にかけてなされた。正典としての新約聖書の結集は、4福音書・使徒行伝、13のパウロ書簡から始まり、『ヨハネの黙示録』を2世紀末に加え、その一部については議論のあった公同書簡7つを最終的にすべて認める形で進行的な。新約聖書の範囲が事実上確定するのは4世紀後半であり、397年のカルタゴ教会会議において西方教会においては正式に承認された。

最後まで残った問題は『ヨハネの黙示録』の扱いである。伝統的に使徒ヨハネに帰されてきた、おそらくは1世紀末に著されたこの文書は、西方では比較的早くから正典の一部として受け入れられた。しかし終末論があまり浸透しなかった東方では、『ヨハネの黙示録』の正典性についてたびたび疑問が提示された。10世紀に至り、正教会は『ヨハネの黙示録』を正典の一部として最終的に受け入れ、新約聖書27文書の範囲がカルケドン信条を受け入れる東西教会のキリスト教全体に共通のものとして確立した。

正典化の過程で重視されたのは、「使徒性」であった。2世紀末から3世紀初めに西方教会で成立したと推定される文献、通称「ムラトリ断片」は、現在の新約聖書とほぼ同じ構成を持つ新約聖書の範囲を示し、それぞれの文書を使徒またはその追隨者に帰し、そのことをもって文書を権威付けようとした。この過程で、いくつかの文書は偽書として退けられた(例:『ラオディキア人への手紙』パウロの手によるものとして書かれている)。また使徒以後の世代に位置する教父たちの文書(例:『ヘルマスの牧者』)は、有益なものとして推奨される一方、聖書には属さないものとされた。その一方で、筆写不明の文書が使徒に帰せられ、あるいは書き手が使徒であると自称するいくつかの文書が留保された。

西方では、ルターの宗教改革の影響で、16世紀から17世紀にかけて、正典の公式な定義が行われた。カトリック教会では1546年のトリエント公会議において聖書の正典・外典の定義が再確認された。プロテスタント教会でも17世紀の中盤に同じ27文書を正典と認めている。